多摩市ヤングケアラーに関する実態調査報告書

概要版

1 調査概要

(1)調査の目的

近年、子どもを取り巻く状況の一つとして「ヤングケアラー」が注目されており、厚生労働省や文部科学省をはじめ、全国の自治体でヤングケアラーに関する実態調査や支援に関する取り組みが進んできています。

多摩市では、ヤングケアラーと思われる子どもを早期に発見し、支援につなげる仕組みづくりの検討を行うことを目的とし、調査を実施しました。

(2)調査対象者

多摩市立小学校 5・6 年生の児童　　2,280 名
多摩市立中学校 1・2・3 年生の生徒　　3,190 名
多摩市内在住の高校生世代(平成 16 年 4 月 2 日生～平成 19 年 4 月 1 日生)の方　3,663 名

(3)調査方法

小学生・中学生は各学校を通じて児童・生徒向け、保護者向けの調査依頼文を配布し、児童・生徒本人がタブレット、パソコン、スマートフォン等で Web 上のアンケートフォームにアクセスし回答しました。また、紙(筆記)での回答を希望する児童・生徒には、紙媒体の調査票と返信用封筒を学校から配布し、郵送による回収も実施しました。

高校生世代は高校生世代向け、保護者向けの調査依頼文を郵送し、高校生世代本人がパソコン、スマートフォン等で Web 上のアンケートフォームにアクセスし回答しました。また、紙媒体の調査票と返信用封筒を同封し、郵送による回収も実施しました。

(4)調査期間

小学生・中学生:令和4年 11 月 28 日～12 月9日
高校生世代　:令和4年 11 月 28 日～12 月 16 日

(5)回収状況

対象	配布数	回収数	回収率
小学生(小学5・6年生)	2,280 件	2,192 件 内訳:Web 回答:2,178 件 郵送回答:　14 件	96.1%
中学生(中学1～3年生)	3,190 件	2,707 件 内訳:Web 回答:2,707 件 郵送回答:　0 件	84.9%
高校生世代	3,663 件	700 件 内訳:Web 回答:　362 件 郵送回答:　338 件	19.1%
合計	9,133 件	5,599 件 内訳:Web 回答:5,247 件 郵送回答:　352 件	61.3%

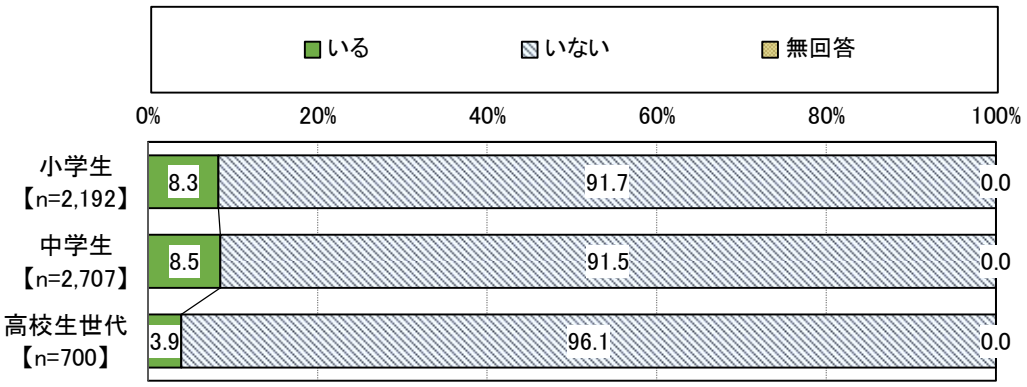
2 調査結果概要

(1)お世話をしている家族の有無

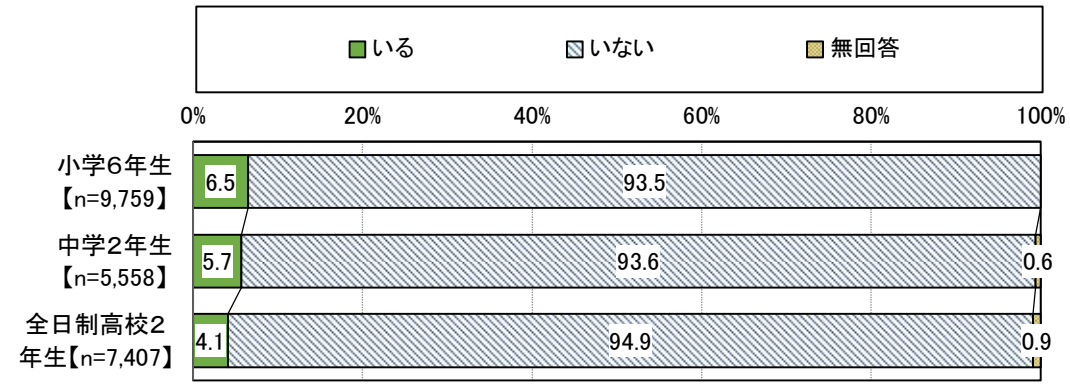
自身がお世話をしている家族が「いる」と回答した人の割合は、小学生で 8.3%(183 人)、中学生で 8.5%(230 人)、高校生世代で 3.9%(27 人)でした。

国の調査とは有効回答数の規模などが異なるため、一概に比較することは難しいですが、小学生・中学生は自身がお世話をしている家族が「いる」と回答した割合が、国の調査結果よりも高い傾向であることが推察されます。

〇お世話をしている家族の有無



【参考 国調査 お世話をしている家族の有無】



☞小学6年生:日本総合研究所「ヤングケアラーの実態に関する調査研究報告書」令和4年3月

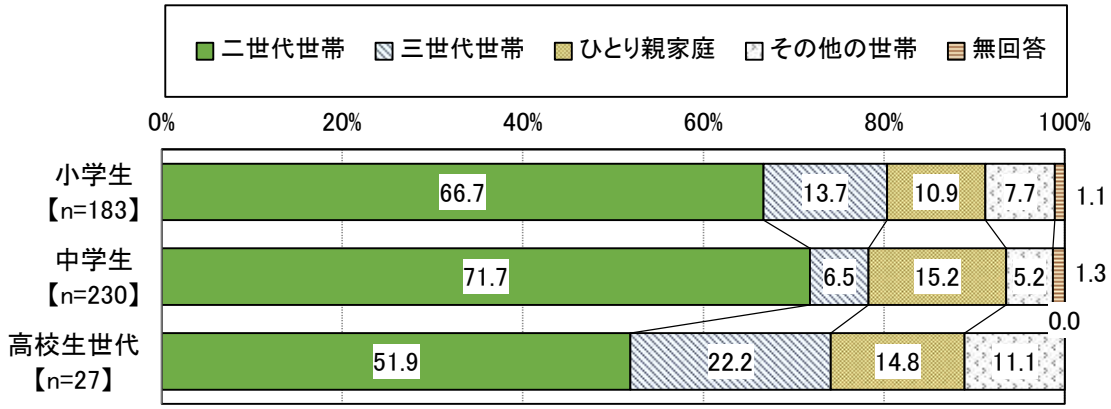
☞中学2年生、全日制高校2年生:三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング「ヤングケアラーの実態に関する調査研究報告書」令和3年3月

※設問によっては、小学6年生に調査を実施していないものがあるため、中学2年生と全日制高校2年生のみのグラフを掲載している場合があります。

（2）家族構成

自身がお世話をしている家族が「いる」と回答した人の家族構成については、各世代「二世代世帯」が最も高く、次いで「三世代世帯」、「ひとり親家庭」などとなっています。

○家族構成

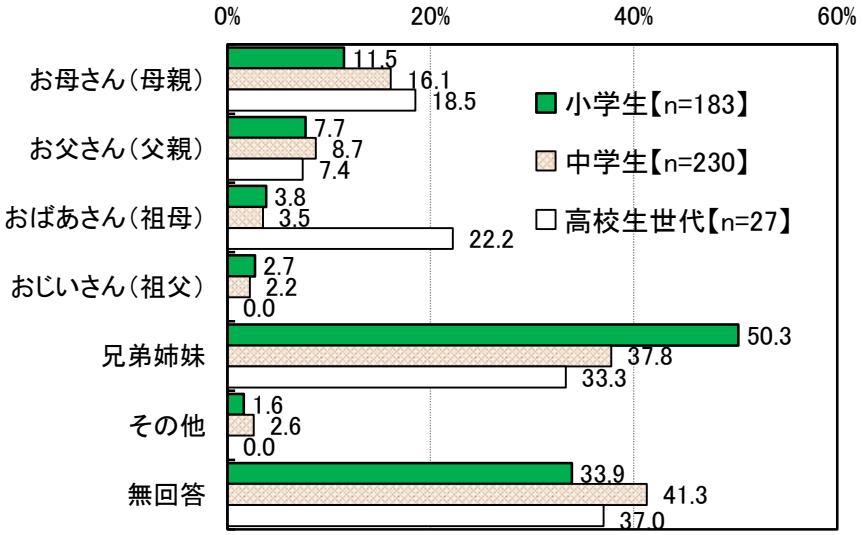


（3）お世話の対象、内容

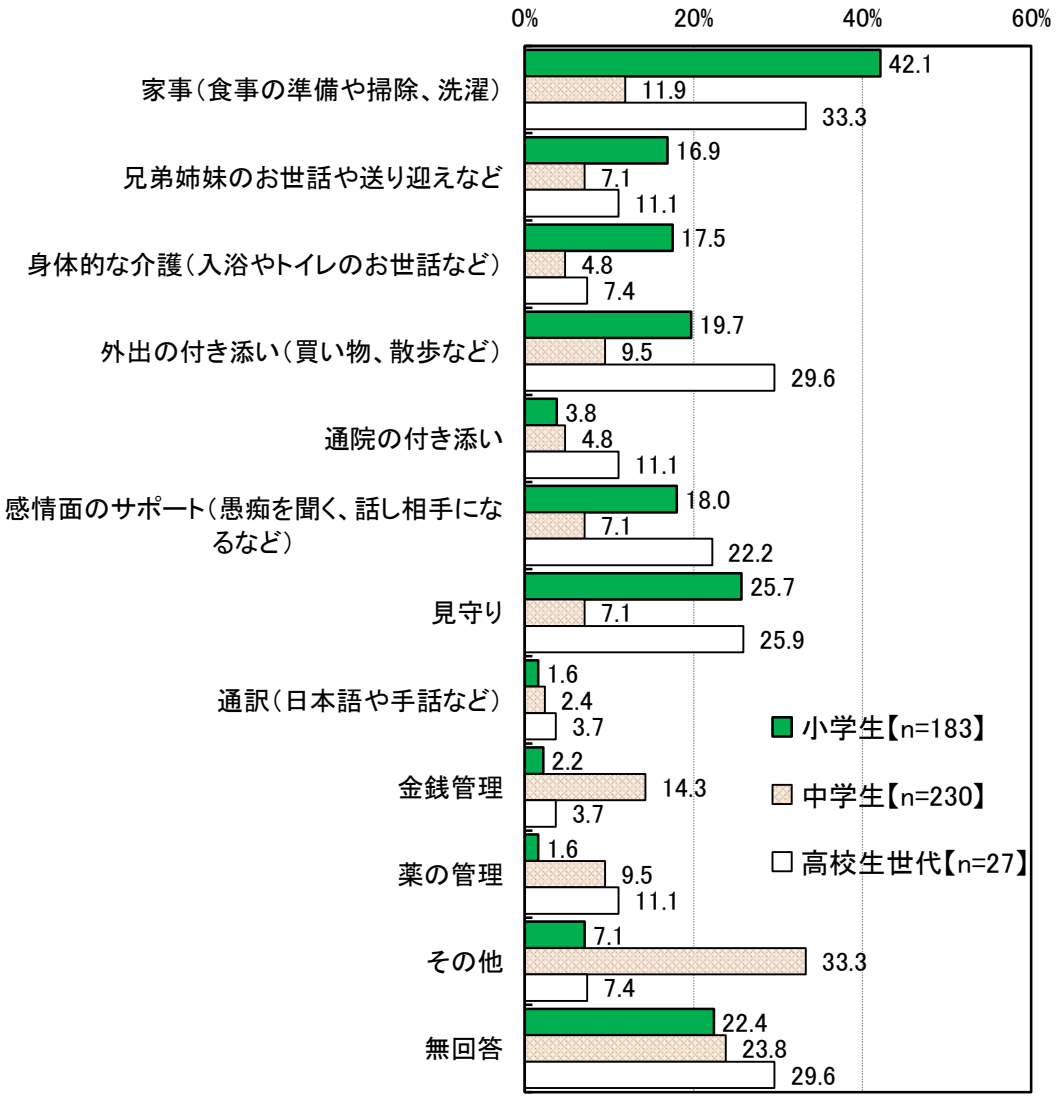
お世話をしている対象については、各世代「兄弟姉妹」が最も高くなっています。

お世話の内容については、「家事（食事の準備や掃除、洗濯）」、「見守り」、「外出の付き添い（買い物、散歩など）」などが高くなっています。

○お世話の対象



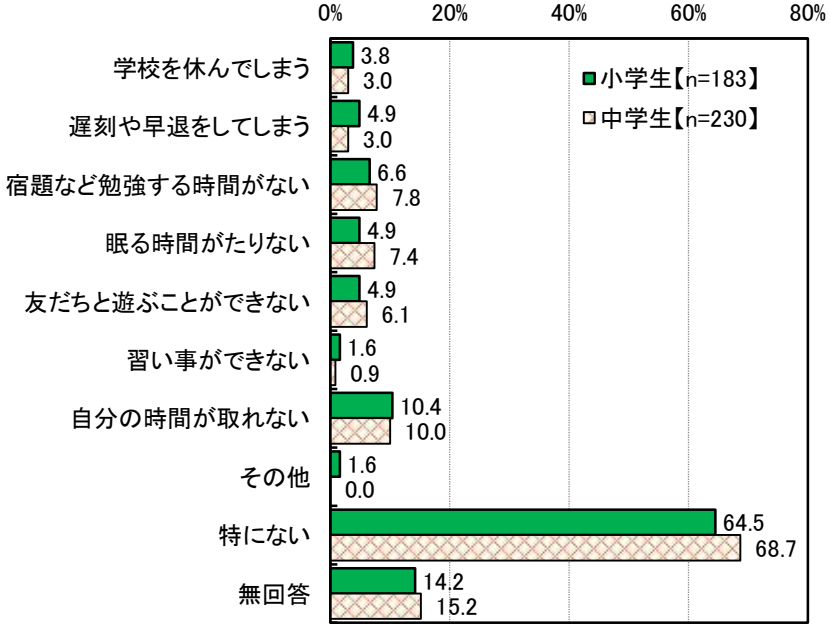
○お世話の内容


0%
20%
40%
60%
家事（食事の準備や掃除、洗濯）
42.1
11.9
33.3
兄弟姉妹のお世話や送り迎えなど
16.9
7.1
11.1
身体的な介護（入浴やトイレのお世話など）
17.5
4.8
7.4
外出の付き添い（買い物、散歩など）
19.7
9.5
29.6
通院の付き添い
3.8
4.8
11.1
感情面のサポート（愚痴を聞く、話し相手になるなど）
18.0
7.1
22.2
見守り
25.7
7.1
25.9
通訳（日本語や手話など）
1.6
2.4
3.7
金銭管理
2.2
14.3
3.7
薬の管理
1.6
9.5
11.1
その他
7.1
33.3
7.4
無回答
22.4
23.8
29.6
小学生【n=183】
中学生【n=230】
高校生世代【n=27】

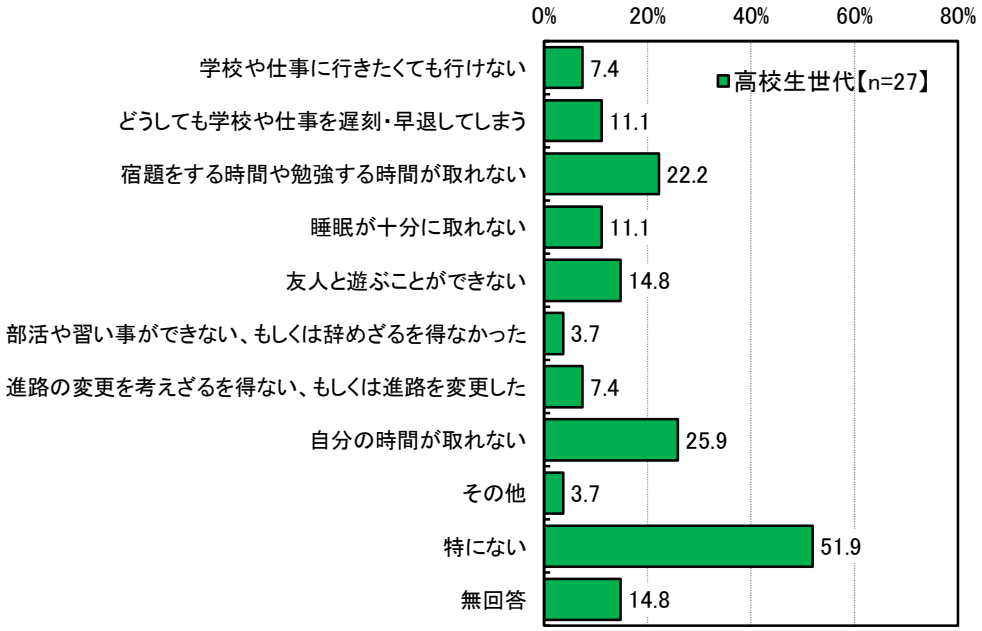
（4）お世話をしているために、やりたいけれどできていないこと

お世話をしているために、やりたいけれどできていないことについては、各世代「特にない」が5割以上となっているものの、その他に、「自分の時間が取れない」、「宿題など勉強する時間が取れない」などの回答もみられました。

○お世話をしているために、やりたいけれどできていないこと（小学生・中学生）



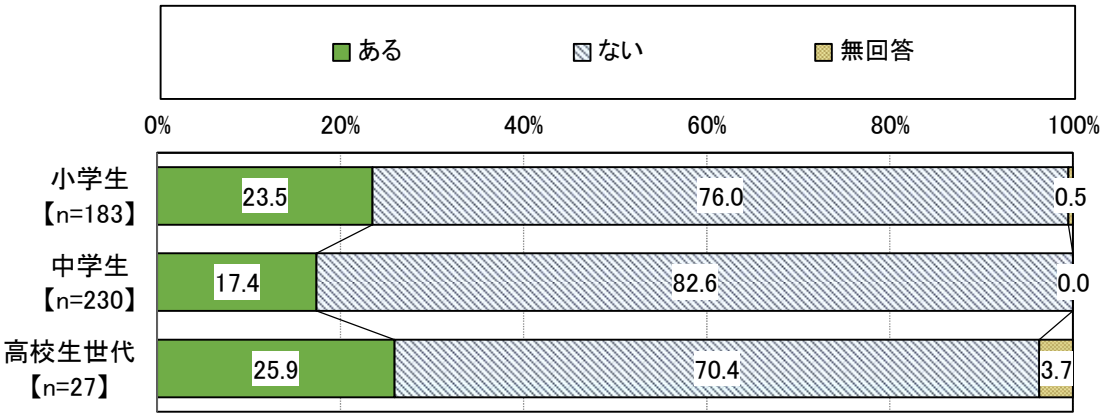
○お世話をしているために、やりたいけれどできていないこと（高校生世代）



（5）お世話について相談した経験

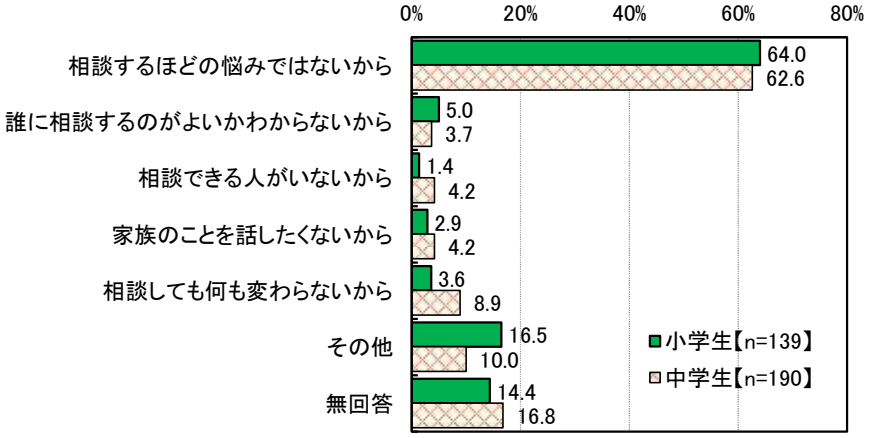
お世話について相談した経験は、各世代約2割が「ある」と回答した一方、7割以上が「ない」と回答しています。

○お世話について相談した経験

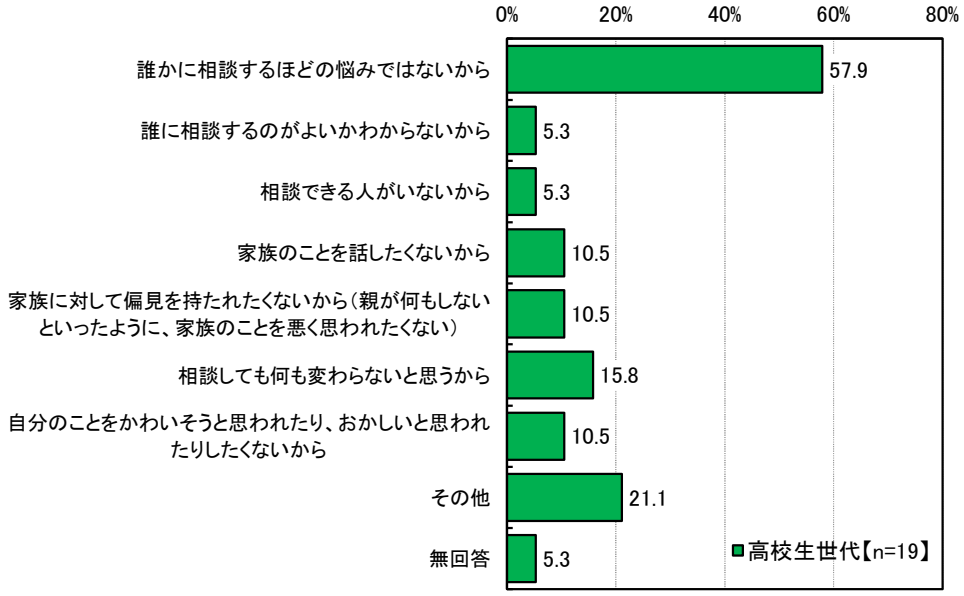


お世話について相談したことがない理由は、各世代「相談するほどの悩みではないから」が最も高くなっていますが、その他に、「誰に相談するのがよいかわからないから」、「家族のことを話したくないから」、「相談しても何も変わらないから」などの回答もみられました。

○お世話について相談したことがない理由（小学生・中学生）



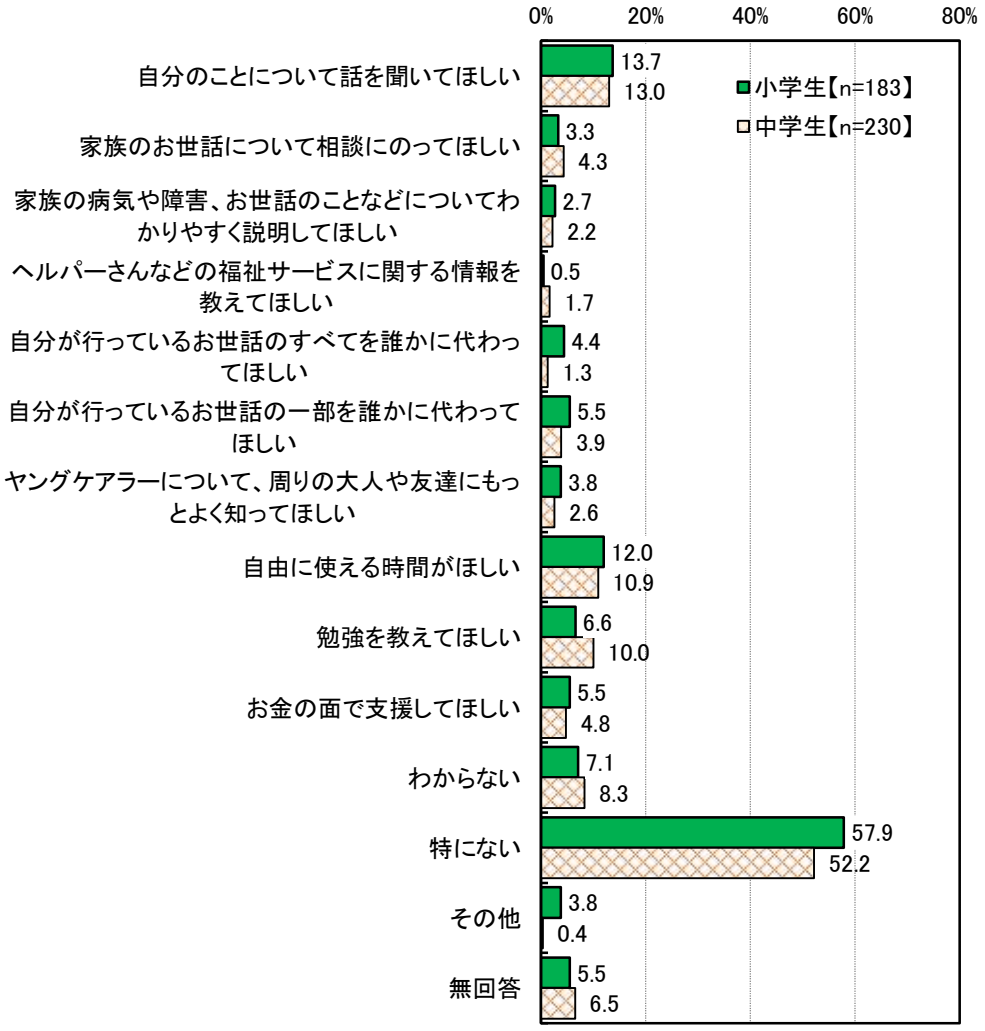
○お世話について相談したことがない理由（高校生世代）



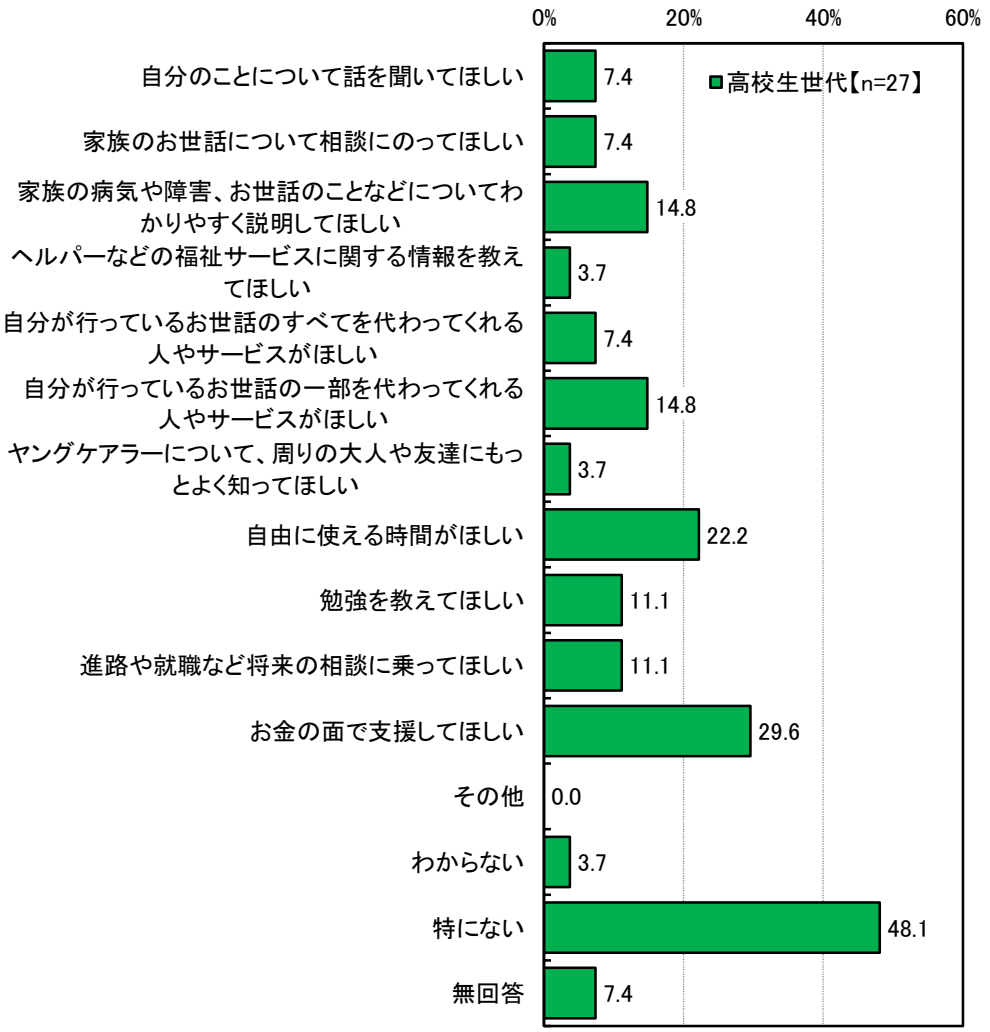
（6）学校や大人にしてもらいたいこと、必要な支援

学校や大人にしてもらいたいこと、必要な支援については、各世代「特にない」が最も高く、次いで小学生・中学生では「自分のことについて話を聞いてほしい」が高くなっています。また、高校生世代では、「お金の面で支援してほしい」が高くなっています。

○学校や大人にしてもらいたいこと、必要な支援（小学生・中学生）



○学校や大人にしてもらいたいこと、必要な支援(高校生世代)



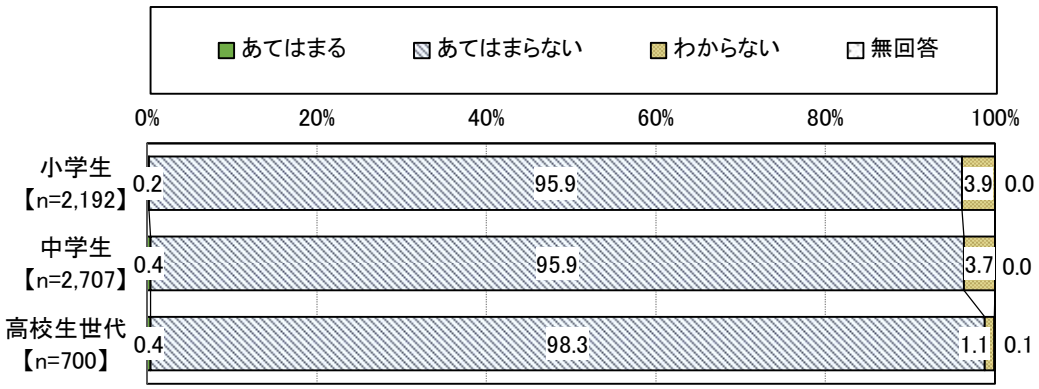
(7)ヤングケアラーの自覚

自身がヤングケアラーにあてはまると思うかについて聞いたところ、小学生で 0.2%(5人)、中学生で 0.4%(11 人)、高校生世代で 0.4%(3人)があてはまると回答しました。

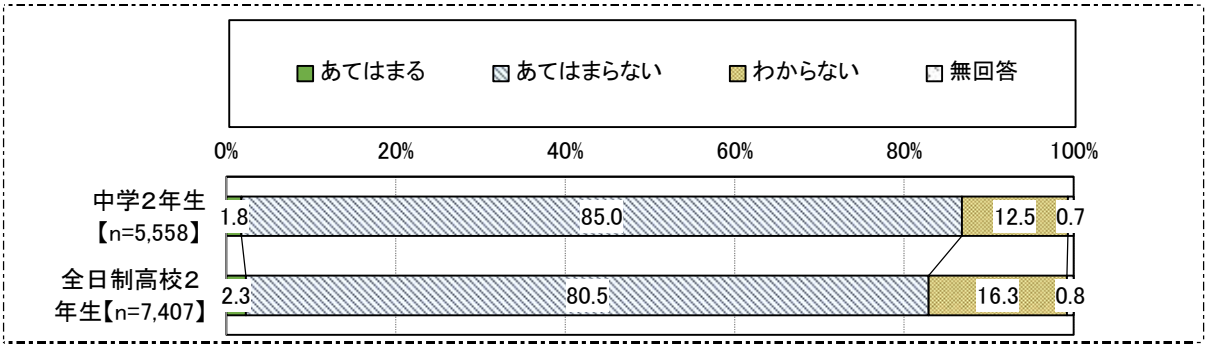
(「あてはまらない」には、お世話をしている家族の有無(問6)で、「いない」と回答した人を含みます。)

国の調査とは有効回答数の規模などが異なるため、一概に比較することは難しいですが、中学生・高校生世代は自身がヤングケアラーに「あてはまる」と回答した割合が、国の調査結果より低い傾向であることが推察されます。

○ヤングケアラーの自覚



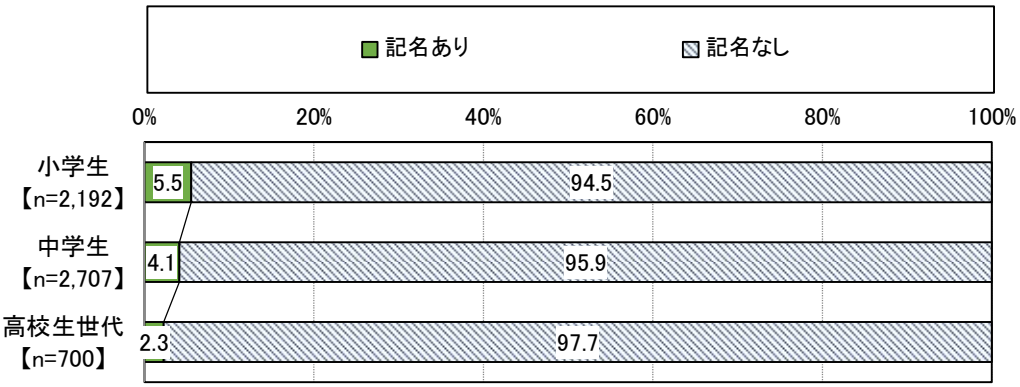
【参考 国調査 自分はヤングケアラーにあてはまると思うか】



(8)支援を求める記名の有無

アンケートの最後に、ヤングケアラーについて悩み、支援を求める子どもが記名できる設問を設けたところ、小学生で 5.5%(121 件)、中学生で 4.1%(112 件)、高校生世代で 2.3%(16 件)の記名がありました。

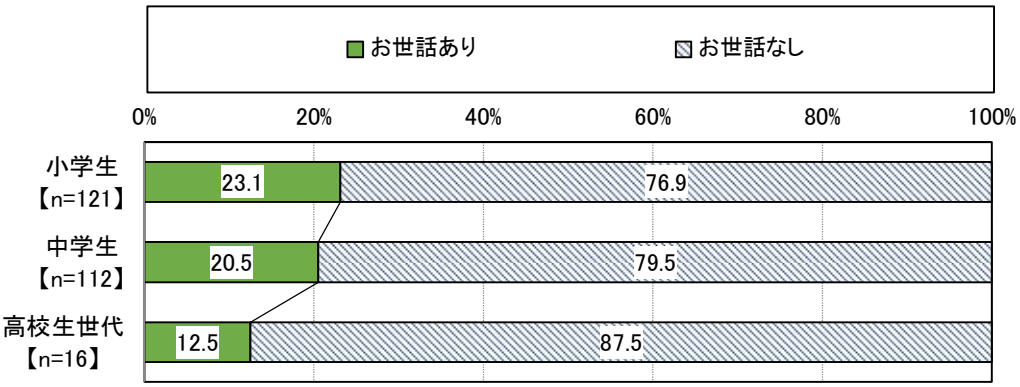
○支援を求める記名の有無



小学生・中学生については学校の協力を得ながら、子ども家庭支援センターが子どもたちの状況を確認したところ、誤って記名された回答も多く見られました。

上記の記名があった子どものうち、問6でお世話をしている家族が「いる」と回答した子どもは小学生で 23.1%(28 件)、中学生で 20.5%(23 件)、高校生世代で 12.5%(2 件)でした。

○支援を求める記名の有無



記名があった子どもで、問6でお世話をしている家族が「いる」と回答している子どものうち、問 18 で自身がヤングケアラーに「あてはまる」と回答した子どもは小学生で 1 件、中学生で 2 件、高校生世代で 1 件でした。

	記名ありのうち、お世話ありの件数	内訳(ヤングケアラーの自覚の有無)		
		あてはまる	あてはまらない	わからない
小学生	28 件	1 件	10 件	17 件
中学生	23 件	2 件	6 件	15 件
高校生世代	2 件	1 件	0 件	1 件

アンケート終了後、子ども家庭支援センターでは学校の協力を得ながら順次記名のあった子どもとの面談を開始しました。

２－（7）で示した、全体の回答数のうち自身がヤングケアラーに「あてはまる」と回答した件数と、２－（8）で示した、記名のあった子どものうち自身がヤングケアラーに「あてはまる」と回答した件数には乖離が見られますが、子ども家庭支援センターおよび学校では、記名が無かった子どもについてもアンケート内容から該当者を想定し、日々子どもたちと接するよう認識を共有しました。

報告書作成時点（令和5年2月28日）で、緊急性のある子どもはいませんでしたが、継続して子ども家庭支援センターと学校では子どもたちの話を聴き、見守りを続けています。

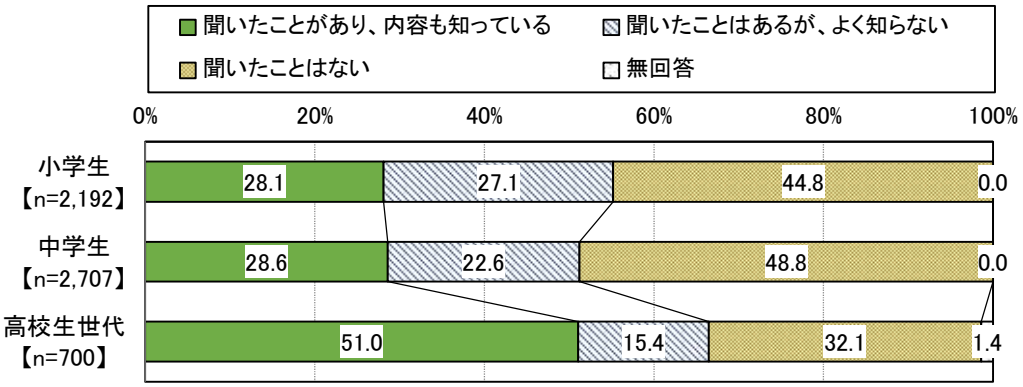
（9）ヤングケアラーの認知度

ヤングケアラーという言葉について、小学生・中学生では約3割が、高校生世代では約5割が「聞いたことがあり、内容も知っている」と回答しています。

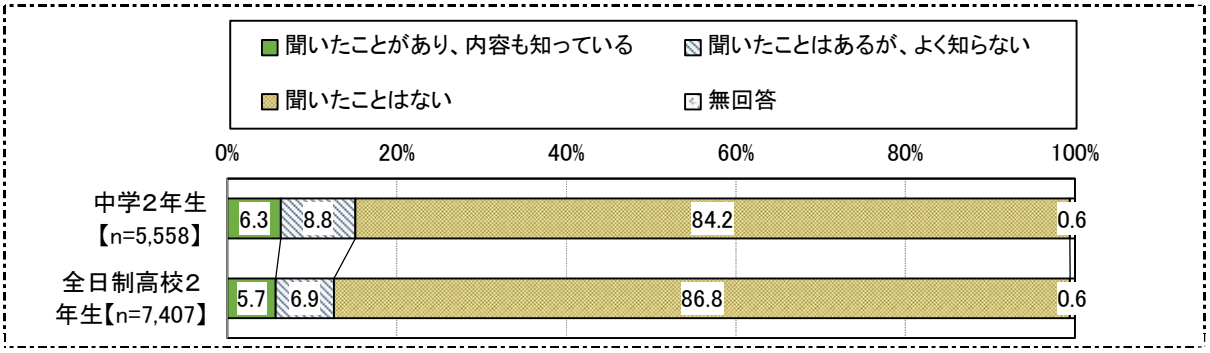
一方で、各世代3～5割程度が「聞いたことはない」と回答しています。

国の調査とは有効回答数の規模や調査時期などが異なるため、一概に比較することは難しいですが、ヤングケアラーという言葉を「聞いたことがあり、内容も知っている」、「聞いたことはあるが、よく知らない」と回答した割合が、国の調査結果より高い傾向であることが推察されます。

○ヤングケアラーの認知度



【参考　国調査　ヤングケアラーの認知度】



3　今後の支援の方向性

（1）「ヤングケアラー」の正しい理解の促進と周知啓発

今回の調査では、各世代 3～5割程度の子どもがヤングケアラーという言葉を「聞いたことはない」と回答しています。早期発見のためには、子ども自身が置かれた状況を認識することが大切であり、そのためにも、ヤングケアラーの正しい認識について広めていくこと、また、そのような状態に陥ったときでも、支援の手段があることについて、周知啓発をしていくことが重要です。

また、子どもの意見を受け止める大人もヤングケアラーについて正しい認識をする必要があることから、子どもと同様に、大人に対しても周知啓発をしていくことが重要となります。

（2）継続的に支援を行うための相談体制

多摩市では、すでに子ども家庭支援センターを窓口とし、ヤングケアラーに関する相談を受け付けていますが、各世代、「直接会って」相談したいという回答の割合が高かったことから、ヤングケアラーを含むさまざまな子どもたちの困難に対応できる人員の配置が必要であると思われます。

また、年齢に応じて徐々にケアの負担が増えることが想定されるため、継続的な切れ目のない支援に取り組むことが重要です。

加えて、対象者である子どもが、自発的に相談することができず、支援が届かないという課題があります。このため、専門職によるアウトリーチ型の取り組みを強化する必要があります。

（3）関係機関の連携した支援

今回の調査では、「お世話」について相談したことがない理由は、「相談するほどの悩みではないから」の割合が最も高くなっていますが、他には、「誰に相談するのがよいかわからないから」、「家族のことを話したくないから」、「相談しても何も変わらないから」などの回答がありました。

ヤングケアラーが家庭内のプライベートな問題であることから、支援が必要な状況にあっても表面化しにくい構造であることが指摘されています。

そのため、学校や地域等での気づきによる早期発見が重要であるという意識の醸成、また、子どもが助けを必要とする状態になったとき、福祉・教育・保健医療などの関係機関が連携して適切な支援に繋げることが重要です。

多摩市ヤングケアラーに関する実態調査報告書　概要版

【令和５年３月】

発　行／多摩市　子ども青少年部　児童青少年課

発　行／令和５年３月